

折疊自宅

五島顯一

タケヒコとユキコの下校タイミングがドンピシャなものも、二人の帰宅ルートが同じ方向だとイマのイマ思いついたようにつぶやくのも、そんな簡単な理由で一緒に帰ろうと誘うのも、タケヒコが校門の陰で待ち伏せしているときまで昨夜の湯船からずっと頭の中で予行演習していたことだ。

それだけ強く意識しているのにテンパってトチらないのは、ダメな平素の性能を普段はナリを潜めている集中力によってカサ上げしているからか。

愛の力とは言うまい。

恋という甘い言葉は身だしなみ無頓着な男には似合わない。

ウサギのような色白の肌が頬骨で灯り、目がきれいにつぶれる笑顔と面して会話すると楽しいだろうなあという夢のような妄想が脳や声帯やその他全身の血の巡りを活性化にしている。

絶対にユキコでなくても、それなり以上に可愛くておしゃべりな女子なら楽しいのに、タケヒコは代替可能性に気づいていない。

日に焼けたような亜麻色の髪が膨らむ小さな肩や青みがかつた円らかな瞳を意識するたびに心臓が早鐘を打って胸の辺りと顔面に熱を帯びさせる肉体反応を、誰とでも気さくに話せる上に興味津々な表情が特に愛らしいユキコとは釣り合わないという現実そのとおり
の現状認識が通せんぼして行き先を失っていたのに目的をすり替えている。あの上目づかいでのぞきこまれたらどんな秘密も打ち明けてしまいそうだ。

誰かに見られたら変な風に見られるんじゃないという至極当然なユキコの疑問を、一定の距離を保ちながら帰るほうが不自然だよと無法の二択問題に変換したのも予習どおり。意地悪な企みにたくましいのを勉強に向ける気は少しもない。

何かを感じたユキコがその違和感の正体を考えようとするよりも前に、タケヒコは割り込んで話題を振り続ける。対応させているうちに、そこには男女が楽しく会話しながら歩いている状態が出来上がっている。卑劣なアリジゴクだ。

あの先公がムカつくだとか、クラスのお調子者がまた何かやらかしたとか、世界に五万でも足りないくらいにある話で盛り上がっている。教師だからといってみながみな出来ている人間ではないし、その人がことあるごとに皮肉を言うのは今に始まったことではない。クラスで面白かった彼の言動も内輪だからこそウケているのだし、周りの雰囲気に乗るのが上手いだけだ。

ユキコは騙されかけている。思わず頬が緩むのは、タケヒコが話しながら笑いかけているのに釣られているからだ。最初はタケヒコのかすかな焦りの心理を表情筋のわずかな緊張から読み取ってユキコは口元を隠したのだ。どう勘違いしたのかタケヒコは増長して、いつのまにか二人で本当に笑いあっている。タケヒコがウイットに富んでいるわけではない。

こうも上手く行くとさらなる欲望が頭をもたげられるらしい。

「そういえば何か課題出てたっけ」

とタケヒコは切り出した。

「明日は、ええと、数学のワークの提出日だったね」

「ああ、そういえば取り掛かってすぐに分からなくなつて、投げ出してた。俺、数学苦手なんだよ」
そのうち、タケヒコの家でユキコが勉強を教えることになった。

コトがいいように進んでいる。連れ込んで何をしようというのか。

ともかく、教科が数学だというのも都合が良すぎる。みつちり、手取り足取り教えるのだから体も近づくチャンスだ。結局、何もかもがタケヒコの追い風だ。

驚いた。

タケヒコが最後の角を曲ろうとして驚いたのだ。そこに建っているはずの自宅の姿がない。

あるはずの場所に見える代理は向こうのスカイブルー。突き抜けていく視界をさえぎる雲は一つもなくてモロ見え。

信じられない荒唐無稽。

まなじりと目頭を断裂させるかというほどに目蓋をカツと見開き、タケヒコは駆けるスピードで鉄門扉の

前に踊り出て、眼球をギョロギョロとせわしなく動かした。マグロと目が合うと怖い。

次いで門扉のロックを外すのにグチャグチャと手間取り、やっと入っては玄関の扉や外壁があるはずの場所に手を落として触れようとする感覚なく突き入っていく。視覚で捉えられないだけでなく、本当に消え去った？

夢ではないだろうか。

タケヒコは確かめようと、頬をつねるのは別の方法を採った。

地面の存在する夢に限るのだが、その地面を強く意識して、思い切り踏んだ。異常な地面の硬さ情報が膝に届く。痛みで目が閉じる。もしも寝ている姿勢なら地面でないものを踏むか空振るかするので、予想外の感触にびっくりして飛び起きるところ、どうやらそうではなく現実。むしろ硬すぎる地面は土やアスファルトではない。

見てみると、目を凝らすまでもなく地面には鉢巻き幅の黒いラインが引かれ、家の敷地いっぱいには幾何学

図形が描かれていた。

ただの図形ではない。足元のラインがあつたはずの外壁に沿っている。

あのラインの上にはふすまが、トビラが、内壁があつた。

同時に気づく、ラインを踏み越えた右足と左足の違和感。体重を交互に左右に振ると、もしかすると。かがんで両手で地面に触れる。ラインの外と内、左手と右手、後者のほうが硬く感じる。

カエルのような姿勢をとつて気づく、鼻に触るにいい。石油樹脂独特の。これは水ノリ。もしかして。

タケヒコはすくつと立ち上がつて走り出し、庭の角にせまく植えられたカキの樹に飛びついた。とおくで、なんだかタケヒコ君忙しそうだしわたし帰るねという声やおざかる運動靴は耳に届いているはずなのに、ということとは情報が脳で処理されていない。

タケヒコは樹にすがつてのぼり、隣家との境のブロック壁の上にまとわりついた。目の前で、偶然壁の上に落ちたカキの実が誰からも放つておかれて腐り始

めている。這う姿勢のまま、むんずとカキを掴むと、手のひらと指のはらが果肉にめりこみ、破裂音とともにガスが噴き出し、小バエが一匹飛んでいく。

ゆつくり慎重に壁から降りようとして落ちて転げる。泥だらけ。

四つん這いのまま、四足で黒いラインの一つに近寄り、カキの実の汁をそれに塗りたくる。

「俺の家は、二次元に折り畳まれて、ノリづけされて、閉じていた！ カキの汁で、このカキの汁でノリを溶かして、元に戻す！」

たしかに、ノリは溶けて、折り畳まれていた最初の外壁は黒いラインからじわりと浮かびあがりはじめた。しかし、急に壁がせり出すスピードが超加速してウォーハンマーのごとくタケヒコのおご下を打ち抜く。体が宙に浮かび上がる。

一瞬の上昇は大気圏外へぶちぬけそうな三半規管。錯覚。

異状下の過剰アドレナリンが阻害する経験則回路。どこにも行けず中空を漂っていずれ墜落する現実。

腐ったカキは遙か彼方なのに。

ジンとする打撲の重い痛みにも毛虫の落涙がほほを摩擦する。放物線にまわりつく体が回転して、目にうつる家は次元の狭間でミテクレの均衡。こちらから気持ち悪く歪んで見えるなら向こうからもおそろく。

ずいぶんと短い時間に高速で思考が回るものだと緩慢な客観視のタケヒコの、そういうえばユミコと思い出す鼻先へと地面が迫って意識を飛ばす。

了

折畳自宅

初出 『混凝土の隙間と奇譚集 二巻』 2009年5月24日 発表

2010年5月9日 公開

著者 五島颯一

編集人 今出川潤

連絡先 vert@bugyo.tk

企画・制作 ver.T

<http://vert.bugyo.tk/>

このお話はフィクションです。
本作品に関する諸権利は著者自身に帰属します。
転載、引用される場合は著者および出典の表示をお願いします。